

# カルシユの足跡を追つて

◇26◇

若松 秀俊

父のフリッツは、人形メヒテルトと二女のフリ  
を買つてくれたし、講談一デルンが分けて所有し  
てくれた。長女のメヒテ後になって、アメリカの  
ルトは寝る前には一人で書店を経て、日本から取  
本を読んだ。そのときのり寄せた。  
絵本は今でも手元においてある。日本的な倫理観  
を併せ持つ彼女の感性の原点でもある。みんなが  
学校に行っている間は、一人で寂しかったので、  
本を読んで過ごすことが少なくなかった。その時  
に培った日本的な感覚は今に続いているという。  
現在は、これらの本を



メヒテルトも読んだ「教訓名畫集」(上)とお気に入りの人形(下)

## 神話も学んだメヒテルト

### 子どもたち

(下)

本は宝物であった。絵本メヒテルトと記している  
本の裏には、自分の名前。  
前を日本語で自ら書いて、彼女の父の影響もあつ  
ている。本来の発音から、日本の神話をよく読  
らう。これらはいえはメヒテルトだ。これも、日本の童  
話と書くのであるが、自話とともに美しい思い出  
として心に刻まれている。昔、誰かから聞いた国の話  
についてである。  
一九六八(昭和四十三)年、カルシユがメヒテルトを伴つて再来日した。このときメヒテルトは風が少し冷たい大社の奉納山展望台に立って、はてしない海と、弓なりの長浜を見ているうちに、そこであること、など、古の人がつくった  
引きの神話を思い出して「今、私たちが立っているこの杵築(きずき)の島(その)の長浜と、わ」とメヒテルトが話したという。  
「国来、国来(くにこ、と)であった。  
少女メヒテルトは、天気の悪い日には家の中  
で、近所の子もたちや

その年上のお姉さんたちと一緒に人形遊びをした。彼女たちが学校に行っている間は、学校に行かなかつたメヒテルトは家庭教師について日本語を学んだ。母からも折に触れて教育を受けたが、一人でもよく人形遊びをする。こうした話は、近所の子もたちがみな知っていたというから、友達からも時折り聞いていたのであろう。  
今も、当時と同じような配置で人形を戸棚に飾っているというのであ  
る。これを聞いていた筆  
者にとっては、アメリカ  
の訪問したときに出会  
た、ソファアベッドにお  
座りしていた古びた人形  
の姿がとても印象的であ  
つた。

東京医科大学大学院教授  
文中敬称略